



# 「白銀」は嘉永年間に新調

## 敦賀の神輿

敦賀市白銀町の神輿——。今は町を練ることはありませんが、神輿の底に「嘉永五年」の文字が書かれています。「嘉永」は江戸時代の末期で、この神輿の古い歴史を示すものと話題になっています。敦賀の神輿をたずねてみました。

敦賀半島  
ふるさと  
紀行

### 「黒船」の前年—神輿の底に文字

白銀町の神輿の文字に気付いたのは3年ほど前。文字が書かれているかもしれないと、神輿を上げ底をのぞいたところ、文字が見つかりました。

神輿の一番下。神輿を支える土台となる部分を台輪と呼びます。木材を箱状に組んだもので、底板に墨で文字が書いてありました。

文字の見つかったのは三か所で、一つは「京都寺町通御池上ル町 住人 御神輿調進所 山口藤兵衛 利久」と読めます。今も京都市役所の住所には「寺町



京都で製作 気比さん祭りて渡御  
これらの文字によれば、神輿は嘉永5

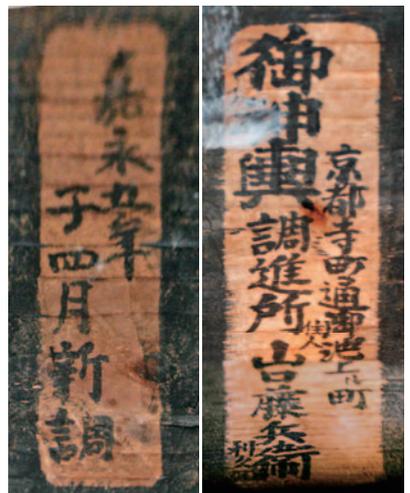
通御池上ル」の文字が残っています。二つ目の文字は「嘉永五年 子四月新調」。「嘉永五年」は江戸末期の西暦1852年で、この翌年ペリー提督率いる米国の黒船が浦賀沖に來航しています。三つ目は「前」と読める文字で、神輿の前方を表しているそうです。

とこれそうです。

長く神輿に携わってきた市内の坂本幸夫さんは、この神輿は屋根に京都風の特徴があると言います。神輿の屋根は通常4つの面から構成されていますが、この4つの面がそれぞれ接し合う部分を覆うように押さえるものが野筋で、屋根の頂点から下へ、縦方向に延びています。この野筋が白銀の神輿では二か所上で反り上がっています(写真A)。坂本さんによれば、二か所あるのは京都風で、白銀はこのタイプ。

神輿は全体が金色に裝飾され、屋根の軒は中央部が上方に湾曲した唐破風。屋根の頂に乗る鳳凰が目をひきます。「サイズは普通。改修を示す文字などが見当たらないので、大きな改修はされていないのでは」とも話しています。

白銀の神輿の底に書かれた製作者名(左)と製作年月(右)ともに画像処理しています。



神輿を持っていたが、何かの事情で手放すことになり、京都市中の神社に預けた。その神社と今の白銀町を仲立ちする人がいて、譲渡されたという可能性はあると思います。

地元の皆さんの話を総合すると、譲渡の時期は戦後のようで、ジェーン台風の来た昭和25年には気比神宮の秋の祭礼で担がれたといわれています。

神輿は主に旧市街を練り回りました。東洋紡績(東洋町)方面にも練り出して、木ノ芽川にかかる橋の上で、行きと帰りの神輿が遭遇し、道の譲り合いで激しく、ぶつけあいをしたこともあったそうです。当時は喧嘩神輿の風潮が強く残っていた時代でした。

その後、傷みもあっていつの頃にか担がれなくなり、現在は白銀町の商業会館に納められています。今も気比神宮の秋の祭礼の時期には神宮の御霊を納めたうえで、市民に見てもらっています。

岩井誠区長は「ただの古い御神輿だと思っていました。明治時代の大黒の神

### 白銀の神輿

とは伝わりませんが、詳しい経緯は不明です。坂本さんは、敦賀の神輿文化は明治以後と見られることから、他の敦賀の町が新調したものとも考えにくいとしたうえで次のように推測しています。

興より古いと知って驚きました。大切に保存していききたいと思っています」と話しています。

この神輿とは別に白銀町では現在、5月の連休に、町内の白銀神社の火神輿を出しています。薪をくべた鉄箱を担いで回る、防火を願う行事です。

### 敦賀町衆の神輿、起点は明治

敦賀は山車の文化の地域と言われ、気比宮の秋の祭礼では、古くから山車が曳かれてきました。明治初期には9月3日に趣向を凝らした小山車が、4日にはサイズの大きな大山車が出ていました。しかし、明治4年の廃藩置県の影響による地元旦那衆の経済的混乱などもあり、明治6年、4日の大山車巡行が廃止に。さらに、3日に出っていた小山車は4日の巡行に変更されました。この小山車は現在の山車につながるものです。

こうして3日の祭りの行事がなくなつたため、極端にその日はにぎわいを失いました。このため、明治8年、気比宮の神輿が町を渡ることになりました。これに後に御鳳輦と呼ばれるようになってい

きました。「敦賀郷土史談」に、「(気比宮の)神幸の始まったのは明治八年の例祭から」とあるのは、この時のことです。

御鳳輦巡幸は、山車に関わる町が費用を負担して甲冑武者姿の犬神人が随行するなどにぎわいが図られました。一方、それ以外の町は神輿を新調し市中に繰り出すようになり、そうした町が年ごとに増えていきました。祭礼に関わる町は山車町、宵山車町、神輿町と呼ばれました。神輿町には松栄・川崎・大島・曙・大黒・津内・北津内・南津内の八つが含まれていました。

山車も神輿も戦時の空襲、戦後の町の統廃合、近年の曳き手・担ぎ手の不足など社会の影響を大きく受けてきました。

### 川崎は100年 八幡神社は小浜藩主から

現在、市内には、いくつもの神輿があります。旧市街の神輿で古いと言われるものをいくつかみると、大黒の神輿(みなどつるが山車会館蔵)は明治32年の製作。敦賀の人が大阪の業者に作らせたこと見られ、市内で一番重いのではと言われます。大黒は現在、津内町、相生町、神

楽町の各一部となつています。敦賀の人が作つて町に出した神輿としては、

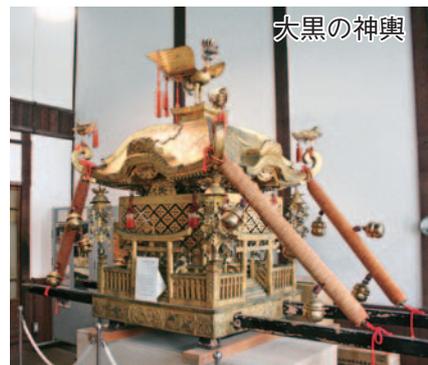
大黒が一番古いのではないかと見られています。

元町の神輿は、詳細は不明ですが、坂本さんは「気比宮が神宮号を宣下された明治28年以降に新調され、恐らく大黒の後では」と推測しています。

川崎の神輿は、大正4年に京都の業者が製作。以来、ほぼ百年の歴史があります。区の記録によれば、気比神宮の祭礼に他の町が山車、神輿を出す中で「此迄何等の催しもなく区民の最も遺憾(いんげん)しかりし」おり、大正天皇即位の大典を記念し、また合併して誕生した川崎区の「区内結合力を強固ならしめん」として新調されました。

こうしたなか、三島の八幡神社の神輿は、小浜藩主・酒井家が文化9年(1812)の同神社の千百年祭を機に寄進し

大黒の神輿



たものと伝わっています。

また、同神社には江戸初期の正保元年(1644)、小浜酒井家の初代・忠勝が寄進した神輿を保存しています。この神輿は気比神宮の御鳳輦のようなものです。町へ出ることはめつたにありません。

敦賀の神輿には残念ながら担がれなくなつたものもありますが、平成に入り、気比神宮の秋の祭礼で、多くの神輿が大鳥居前に一堂にそろって威容を見せるなど、にぎわいを取り戻しています。

【参考】「敦賀祭礼の山車」(敦賀市教育委員会)、「敦賀郷土史談」(山本元著)

八幡神社の神輿



蓬菜の神輿



松栄の神輿



川崎の神輿



元町の神輿

平成25年9月、気比神宮の例祭で